

<ワークショップ報告>

I-A 「総合的な初年次教育プログラムを編成する」

担当者 : 杉谷祐美子(青山学院大学)

概要 : 「第2ステージ」に入った日本の初年次教育は、多様な実践活動を蓄積し、相互に情報共有するだけでなく、そうした様々なコンテンツからより効果的な教育内容・方法を精選しつつ、総合的で体系的なプログラムとして編成することが求められている。本ワークショップは、今年で4年目を迎える。毎年、個人作業・協同作業を織り交ぜたアクティビティを行い、そのワークの成果を翌年に反映させながら、内容を徐々に発展させてきた。これまでを振り返ると、1年目は初年次教育の多様なコンテンツに関する情報収集と整理、2年目はスチューデント・スキルの育成を機軸にしたプログラム実施の提案、3年目は3科目で構成するプログラムの到達目標と具体的内容の考案を行った。今年はいこれら3年間のワークを総括し、そこで提案された初年次教育の到達目標やコンテンツを改めて整理して提示した。そして、それらに基づき、フロアとともに総合的な教育プログラムの編成方針とプログラムのバリエーションを探ることを目標とした。

キーワード : 教育プログラム, 到達目標, コンテンツ, 総合的

I-B 「文章表現科目を開設・実施するために」

担当者 : 中村博幸(京都文教大学)・成田秀夫(河合塾)・大島弥生(東京海洋大学)

概要 : 学生の「文章表現力」を高める事は、初年次教育の中で大きなウェイトを占め、「初年次演習」の中でも、大なり小なり「文章表現」を意識した授業内容が多い。また「文章表現科目」だけを独立した科目として開設する場合もあるが、その開設形態は多様である。一方「文章表現科目」開設にあたり、開設担当者になった教員や、授業を担当する事になった教員の中には、様々な開設状況や授業の組み立てノウハウに疎い教員も少なくない(コーディネータ教員も同様)。そこで、「文章表現科目」を担当する事になった教員がカリキュラム設計を行うプロセスをワークショップ形式で体験して貰う事を企画した。その様な立場の教員が開設にあたり押さえる(準備すること)は何か、またカリキュラム設計をどうすればよいかをともに考える場を持った。この体験プロセスは、「初年次演習」のカリキュラム設計にも応用できると考える。カリキュラム作成のFDとして、ワークショップが役立てば幸いである。

キーワード : 文章表現, カリキュラム設計, 授業設計, ワorkshop形式のFD

1-C 「どのように初年次教育の組織的導入をはかるか」

担当者 : 濱名 篤(関西国際大学)

概要 : 多数の大学が初年次教育の導入をするようになり、初年次教育自体についての一定の理解は得られるようになってきた。しかし、その内容は学習技術などが中心にとどまっている。自大学にあった初年次教育のプログラム内容をどのように決めていくのか、どのような体制作りをすればいいのか、どのような人が中心になり、どのような準備やFDをしてスタッフを確保していくのか、そのためにどのような教材や教育方法を選択していけばいいのか、どのような評価プランを考えるのか等、初年次教育のプログラムづくりと組織運営について、参加者に能動的に参加してもらいながらワークショップを進める。初年次教育学会の新規入会者や初年次教育の経験の少ない人に向けた内容。

キーワード : 組織的導入, FD, 教材, 学習成果

1-D 「協同学習の考え方と進め方」

担当者 : 岩田好司(久留米大学)

概要 : 近年、学校教育において協同学習が広く認められつつある。その理由としては、社会の変化に伴う教育観の変化がまずあるが、方法の汎用性や統合的な学習効果に優れている点などが挙げられる。実際、協同的アプローチは年齢や分野に関わらず適用でき、その効果は、認知面での学習成果のみならず、対人関係などの社会性面や自尊感情などの心理面に及ぶ。このような意味で、分野横断的に統合的支援を行う初年次教育や大学教育一般にも広く援用されることが期待される。このような観点から、本ワークショップでは協同学習の基本的な考え方や進め方を体験的に学び、身に付けた技法をそれぞれの現場で実際に使うことができるようになることを目指した。また、協同学習法は、授業のみならず、FD・SD活動などのグループファシリテーションにも有効な技法であり、初年次教育に携わる多様な人々の参加があった(参加者36名)。

キーワード : 協同学習, 大学授業, 構成的教授学習観, 大学適応, 学習スキル

II-A 「初年次教育の評価の方法を考える」

担当者 : 山田礼子(同志社大学)

概要 : 初年次教育の評価には、さまざまな方法がある。例えば、学生調査、授業評価、プログラム評価、ポートフォリオ評価等が代表的な評価法である。こうした方法のどれが適切であるか、どれが効果的であるかは学生の特徴やプログラムの性質によって異なる。言い換えれば、多様な大学や多様な学生の存在により、適切な評価方法も多様であるともいえる。本ワークショップでは、参加者が自分の大学の初年次教育を通じて使用あるいは利用している評価方法を互いに紹介しながら、その特徴、利点などをより深く分析する機会を提供することにした。こうした機会を通じて、参加者は自分の大学に他の評価方法を取り入れていく可能性について考察することもできた。

キーワード : 初年次教育, 評価方法, 学士課程教育

II-B 『身体知』の導入—言語と非言語のワークショップ

担当者 : 武藤浩史(慶應義塾大学)・横山千晶(慶應義塾大学)

概要 : 身体を見据えたコンテンツをどのようにカリキュラムの中に意識的に取り入れていくのかは、高等教育の各分野で現在真剣に思考され試行されているテーマである。昨今、大学だけでなく、中学校や高校レベルでもサービス・ラーニングやボランティアを積極的にカリキュラムの中に入れていく傾向があるものの、いまだ座学と経験は分離してとらえられがちである。また体験したことを言語によりふたたび発信していくための方法論も十分に議論されてはいない。このワークショップでは、身体的な「気づき」と協働による活動を通して、からだと言葉をつなぎ合わせることにより、初年次より大学生にふさわしい言語力を構築する方法を参加者とともに模索した。初めにウォームアップを行った後で、言語テキストを使つてのワークショップに入った。使用したテキストはウィリアム・シェイクスピアの *Romeo and Juliet* の冒頭部分である。ここではあえて英語という「音」にこだわってみた。音読しながら言語の中に示唆される様々な動きと人々の位置を読み解き、いかに解釈が深化するのかを体験するためである。その後、解釈したことを演じてみることで、さらに言語から身体への移動を通して、解釈を深化させた。このような試みは他の様々な教育の場面で応用可能であろう。

キーワード : 身体知, からだと言葉, 協働, コミュニケーション

11-C 「学生支援を構造化する —初年次の取り組みから総合的デザインまで—

担当者 : 川島啓二(国立教育政策研究所)

概要 : 学生支援は、教育と研究を支える基盤として、大学において重要な役割を果たしてきたが、近年では、学ぶ主体としての学生の積極性、協調性、コミュニケーション能力等を高める機能としての学生支援(ピア・サポートなど)に注目が集まったり、正課・正課外を通して学士課程全体を通じての統合的な学生支援によって、学士課程教育の成果に貢献していくという観点が提起されたりするようになった。その結果、学生支援は、学生相談、キャリア支援、経済的支援、学習支援、ピア・サポートなど、その領域は大変広範なものになってきており、各大学の教育目的や学生の状況に合わせた構造化が課題となってきている。学生支援のメニューは、学年という基本的枠組に依拠できる正課カリキュラムとは異なってアカルト的になっているので、目的、方法、担い手といった要素を勘案しながら整理と構造化が求められる。本ワークショップにおいては、ミニレクチャーとワークを通して、参加者の所属大学における学生支援の洗い出しと観点の提示を行い、その構造化の端緒を得ることを目標として実施された。

キーワード : 学生支援、学生の成長、職員の役割

11-D 「最初が肝心！初年度4月に新入生全体に『学び方』を教える」

担当者 : 羽根拓也(アクティブラーニング)

概要 : 授業を聞かない、おしゃべりをする。高校から続くこうした「受講態度」に慣れ親しんだ学生を集中させるのは容易ではない。大切なのは、大学入学後の初年度に適切な「受講態度」を徹底的にトレイン(=訓練)すること。講師の話聞く時は聞く、学生同士で有意義なディスカッションをする時にはとことん話させるといった「オンオフ」のトレーニングを定着させ、かつそうした授業では、内容理解が進み、得られるものが多いのだということを体感させることが鍵。初年度、特にオリエンテーション期間中にこの態度を定着させることができれば、その後の授業運営が大いにやりやすくなる。入学後すぐに、「大学の学び方：アクティブラーニング」と称し、全新入生に向けて「学び方」クラスを導入し、高い成果を上げている大学事例をビデオで紹介。かつ、本プレゼンテーション自体を、いわゆる「能動参加型(=アクティブラーニング)」形式で実施し、参加者理解を深めた。

キーワード : 初年次教育、アクティブラーニング、受講態度、学び方

スペシャル企画 「初年次教育学会誌への投稿論文の書き方」

企画 : 初年次教育学会誌編集委員会

担当者 : 藤田哲也(初年次教育学会誌編集委員会編集委員長・法政大学)

概要 : 本第4回大会開催の時点で、「初年次教育学会誌」は第3巻第1号まで発行済みであり、次の第4巻第1号の発行に向けて編集作業を行っている最中であった。編集委員会としては、より多くの会員から本誌への投稿論文が寄せられることを望んでいる一方で、掲載する論文については一定の質を保つことに責任を負うという立場にもある。実際に、過去に投稿された論文の中には、残念ながら我々の求める基準に合わずに、掲載できなかったものもある。大学教育においても、到達目標や評価基準を明示することが必須になっている。とりわけ本学会のように、会員の持つ学問的背景に多様性がある場合には、投稿論文に対してどのような観点および基準で査読を行うのかを、事前に周知しておくことが望ましいと考える。そこで本大会ではこの編集委員会企画を、論文の体裁・書式に関する基本事項の確認からはじめ、「研究論文」「事例研究論文」それぞれについて掲載可と判断できるための最低限必要な要素についての、編集委員会の意向を会員の皆様に説明する機会とした。

キーワード : 初年次教育学会誌, 編集委員会, 投稿論文, 研究論文, 査読